「書くこと」の授業で思考力を育成する
―対話とモニタリングを通して―

山口大学
岸本　憲一良

一　はじめに

恩師からお便りをいただいた。

丁寧に書かれた文字が整然と並んでいる。お忙しい先生である。貴重な時間を割いてくださり、お便りを書いてくださっている様子を想像する。

文中に、「岸本さん」と私の名前が出てくる。書きながら私のことを思ってくださっていることがあらためて分かり、ありがたく、うれしく思う。

私の今を思い、励ましてくださる言葉で締めくくられている。恩師に対する感謝の気持ちと、がんばらなければと奮起する思いとが湧いてくる。

これらは、お便りを拝読した際の私の「読み手としての反応」であり、「思考」である。文字や文章と、お便りを書いてくださった恩師の思いや状況とを（あくまでも想像したものではあるが）、関係づけてとらえようとしている。この時の『私』の中には、文章をそのまま読み解く「読み手」と、私が想定した恩師という「書き手」とが存在する。自己内におけるその両者の対話によって、これらの思いが生まれてきたといえるのである。

二　「書くこと」の授業で大切にしたいこと

（一）「書き手」の中に「読み手」をつくる

「書くことにおける思考」については、「はじめに」で述べたことの逆を考えればよい。相手を設定して書く場合、「書き手」である『私』の中に「読み手」をつくり、絶えずその「自己内の読み手」と対話をしながら活動していくのである。

「書くこと」に意欲的に取り組む子どもほど、「表現したい」、「伝えたい」という思いが勝り（これは非常に大切なことなのだが）、「読み手の立場に立つ」ということを忘れてしまいがちになる。いわば、書き手から読み手に向かう一方向のベクトルのみが意識されている状態である。「書き手が伝えたいこと」と「読み手に伝わること」とは、ズレが生じる場合の方が多い。であるからこそ、書き手はそのことを認識し、絶えず自己内に想定した「読み手」と対話をしながら活動を進めていく必要があるのである。そうすることで、書き手は読み手との「双方向のベクトル」を意識することができる。

（二）他者と対話する

授業の中で特に大切にしたいことは、「共同で思考する場を意図的に設ける」ということである。これは、「他者との対話（クラスの友達や教師との対話）」を設定することを意味する。

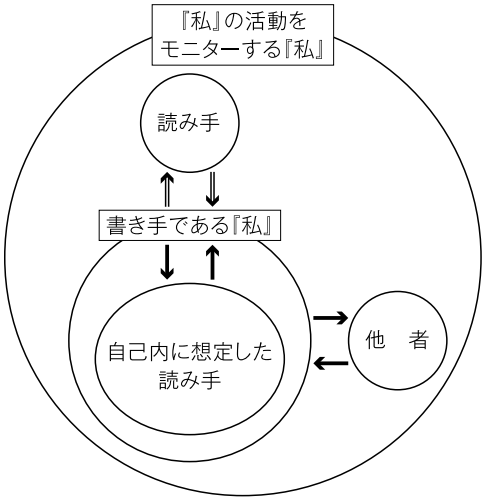
「書くこと」は本来個人の作業であるから、核になるのは先に述べた「自己内の対話」である。ここで「共同で思考する」ことを重視するのは、他者の思いや考え、価値観等に触れることができるからである。それによって、『私』の中に新たな気づきが生まれ、核となる「自己内の対話」がより活性化されること

になる。そして、その気づきが自己の成長となり、一層効果的な文章を構築していくということにつながっていくのである。

(三)自己の活動をモニターする

書く活動をしている『私』をモニターする、もう一人の『私』をつくっておくことも大切である。このことは、書く活動過程を通して自己を省察していくことにつながる。「生活に生きて働く」ということを考える場合、この省察的思考こそ重視すべきものである。

以上二で述べてきたことを図にすると、次のようになる。



三　「書くこと」の活動過程における思考

導入では、まず、「期待する読み手の反応」について考えさせることが重要である。このことによって「書くこと」に必然性が生じ、自ずと主題について考えることになる。この「期待する読み手の反応」は単元全体を貫いて意識されるものであり、先に述べた「自己内につくる読み手」のよりどころとなるものである。

取材活動では、主題を意識しながら材料を集めることになる。この活動においては、区別したり選択したり、あるいは分類したり整理したりといった思考場面が考えられる。

構成、叙述の段階では、「効果的な表現」について論理的に考えることが必要になってくる。順序づける、関係づける、そして理由づけるなどの思考が要求されることになる。

同様の観点で、推敲、評価もなされていく。

いずれにしても、その思考の柱となるのは「期待する読み手の反応」であり、思考は「自己内に想定した読み手」との対話によって行われるのである。

「書くこと」の活動過程においては、様々な思考場面、様々な思考内容、様々な思考方法が考えられる。指導者としては、目の前の児童・生徒の実態、発達段階等を踏まえて、具体的に計画を立てておくことが必要である。

四　おわりに

思考力、とりわけ論理的思考力の育成が叫ばれている。以上述べてきたように、私はこれを人と人との営みの中で考えたい。読み手の反応を想像し、あれこれと工夫を凝らすのは、実に楽しい作業である。そこには、論理は必要不可欠なものとして存在する。このことを再認識した上で、思考力の育成に取り組みたいものである。

また、書くこと自体が自己内対話を意味し、思考を深めるということも忘れてはならない。「書くこと」の授業だけでなく、他領域、他教科の授業においても、書くことを大切に扱っていきたいと考える。

きしもと　けんいちろう　公立小学校教員、奈良県教育委員会指導主事を経て、現在、山口大学教育学部准教授。研究テーマは主として「書くこと」。小・中学校の先生方と、魅力ある国語の授業づくりについて実践的研究を進めている。